

2016年6月5日

「わたしは…罪を霧のように吹き払った。わたしに立ち帰れ…」 イザヤ44:22

主なる神は、偶像の神々がきらびやかであっても無力なのに対して、大きな力をもって世界の歴史を変える方です。

大国バビロンでは、マルドゥク神を頭に多くの神々の偶像が造られていました。預言者はその様子を細かく観察して（→40:18以下）、「木材の半分を燃やし…残りの木で…偶像を造り…お救いください」と祈る人々を、同情的に描きます。どんなに立派でも、結局は「ものの言えない偶像」（Iコリント12:2）です。

一方で主は、「ヤコブよ…イスラエルよ」と呼んで、「わたしを忘れてはならない」（「あなたはわたしに忘れられることがない」新改訳）と堅い絆を強調されます。「一度正しい道を歩み始めた者が、それから離れることは不可能である。」（カルヴァン）彼らの罪は、「（乾燥地帯の）雲…霧のように」忘れ去られて快晴の空のようです。天地も喜びます。

「あなた（イスラエル）を母の胎内に（時間をかけて）形づくられた」主は、「（ペルシャ大王）キュロスに向かって、「わたしの牧者」と呼ばれ（→41:2）、廃墟となったユダの町々やエルサレムの神殿を再建するための使者とされます。

私たちの罪を赦してくださった神に立ち帰って、「飼い主わが主よ…われらは主のもの」（讃354番）と歌います。

2016年6月12日

「地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ。」 イザヤ45:22

キュロスによるバビロン解放のニュースは不安を与えますが、主なる神は世界が混乱しても、秩序を回復されます。

神は世界の創造者ですが、「混沌（トーフ）として創造されたのではなく」（→創世記1:2）、「人（全人類）の住む所として形づくられ」、「混沌の中にわたしを求めよ」とは言われません。「正義を誇り、公平を告知する者」です。

戦乱の中で「国々から逃れて来た者」たちは、「救う力のない神」に失望し、「救いを与える神」を求めます。その場合に、「だれがこのこと（バビロンの解放）を昔から知らせていたか」ということ、つまり実際に歴史を支配しているのは主なる神だと、知って欲しいのです。

「わたしの口から恵みの言葉が出されたならば…決して取り消されない」（→55:11）と言われる主が、「わたしの前に、すべての膝はかがみ…」と、やがて全世界の人々が主を賛美するようになると言われます（2500年後の福山でも！）。主に逆らった者も「主に服し」、「正しい者とされて誇る」でしょう。「異邦人で救いに入れられた者は皆、アブラハムの子孫と見なされる。」（カルヴァン）。

「地の果て（複数）」にいるどんな人でも、「汝ら我を仰ぎ見よ、さらば救われん」（文語）と招かれます（讃247番）。

2016年6月19日

「あなたがたは力を受ける。…地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」 使徒言行録1:8

人生における最後の言葉は大事です。主イエスの最後の御言葉は、復活のあと昇天される前に語られました(→使徒1:8、マタイ28:18、マルコ16:15)。

これら3つの言葉に共通しているのは、2千年前に死んだ御方でなく、今も生きておられる御方が語られたことです。

「力を受けて…わたしの証人となる」という予言はその通りになりました。東洋から始まったキリスト教は世界の果てにまで伝わり、私たちはその証人です。

「全世界に出て行って」は命令です。キリスト者はそれに従いました。安全な所に居て、教会の中で外から来る人を待つのではなく、人が居る所に出て行くべきです。私たちはそれに従って日本に来ました。この命令に具体的に従わないと不自然なクリスチャンになります。マルコの最後に「アーメン」とあるが、「はい」と言うことです(アルツハイマーになった元宣教師が招きに「はい」と言う)。

「すべての民を弟子にきなさい」とは難しい命令です。しかし、「いつもあなたがたと共にいる」と言ってくれる御方の力が与えられます(1978年に来日した時の私たちは何も出来なかった!)

「また日本に来てください」と言われるが、「天国で会いたいです」と答えます。(ヤング師の説教要旨—文責生田)

2016年6月26日

「わたしがあなたがたを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」 イザヤ46:4

長く続いた捕囚生活の中で、民の中にはバビロンの神々に心を寄せる者もいたので、主なる神との違いを語られます。

ここでは「ベル(と呼ばれるマルドゥク神)はかがみ込み、ネボ(その息子とされる知恵の神)は倒れ伏す」と、今は華やかにパレードする神々が、バビロン滅亡の時には「重荷となって、疲れた動物に負わされる」と主は予告されます。「それに助けを求めて叫んでも答えず、悩みから救ってはくれない」のです。

それに比べて主は、「イスラエルの家の残りの者」を「生まれた時から負われ、胎を出した時から担われ」るようにして産み育ててくださいました。「母親が子どもを胎内で運び、産まれてからは懷に抱いて運ぶように。」(カルヴァン)さらに「あなたたちの老いる日まで、白髪になるまで」背負うと約束されます。

民に対しては、「背く者よ、反省せよ…思い起こせ、初めからのことを」と語り、改めて「東から猛禽(キュロス)を呼び出し…語ったことを必ず実現させ」るし、「もはや遠くはない」ので、辛抱して待てと言われます(→ヨブ2:10)。

「我つくりたれば、もたぐべし、我また負い、かつ救わん」(文語)と、主は父親のようでもあります。「主よ、み手もて引かせ給へ」(讃285番)と歌います。